

市民プレス

SHIMIN PRESS

10月5日 第66号

2014年(平成26年)

発行人 原昭二
編集人 デジタル工房
制作 E-mail hara@camelianet.com
TEL 090(3048)5502
〒353-0004 埼玉県志木市本町2-4-43

市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

「市民プレス」電子版(無料)を公開しました
http://pr-shimin.camelianet.com
電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1 歴史を紐解く 南北朝と足利政権 その二 室町幕府の成立! 尊氏の後継ぎは義詮に 政権内の紛争に直面 南朝に降るか政権に帰順か
- PAGE 2 二代將軍義詮も死去する 河越氏の終焉 武蔵平一揆を率いた河越直重 武蔵平一揆の乱 氏満が二代鎌倉公方を継ぐ 吉野行宮と賀名生行宮
- PAGE 3 後村上天皇は住吉行宮で崩御される 南朝方の戦士だった後醍醐天皇の皇子たち 護良、尊良、宗良、恒良、成良親王・・・
- PAGE 4 義良、懐良親王は・・・ 日朝貿易のはじめ 三代義満の時代へ

南北朝と足利政権

室町幕府の成立!

足利尊氏の後継ぎは義詮に
正平十三年(1358)延文三年(1358)四月、尊氏が死没し、十二月、嫡男の義詮は征夷大將軍に任ぜられ、翌年二月、武蔵守を兼任する。

南朝軍を抑えて小康状態に
一方、対する義詮は、北朝を存続させるため、正平八年八月、後伏見上皇の女御(光厳及び光明天皇の実母で、院号は広義門院)の西園寺寧子を治天に推し、彼女の孫を天皇に擁立した。北朝四代の後光厳

皇に擁立した。北朝四代の後光厳倉公方の足利基氏と関東管領の畠山国清は、竹沢右京亮と遠江守江戸高重にこの迎撃を命じた。江戸高重とその甥下野守は三百余騎を率いて、十月、多摩川の「矢口渡」で義興(二十八才)を謀殺した。

歴史を紐解く

野守は三百余騎を率いて、十月、多摩川の「矢口渡」で義興(二十八才)を謀殺した。

政権内の紛争に直面する・・・
尊氏が死去して仁木頼章が執事を兼ね、足利義詮からの援軍要請を受けて関西に攻め上ったが、陣中の紛争に巻き込まれる。

さらには畠山氏も失脚する
畠山国清は、足利義詮からの援軍要請を受けて関西に攻め上ったが、陣中の紛争に巻き込まれる。

「太平記」には「山は崩れて谷を埋み、海は傾いて陸地に成しかば、神社仏閣倒れ破れ、牛馬人民の死傷する事、幾千萬と云数を知らず」と記述されており、多少の誇張はあっても、大方は史実に基づいていと見られている。

鎌倉に戻った基氏は、上野・越後の守護職を公式に憲頭と与え、関東における足利勢力を固めることができた。

義詮の生い立ちは・・・
二代將軍となった義詮は、元徳二年(1332)尊氏の三男(二人の庶兄は婚外子の兄)につづくとして鎌倉に生まれる。母は北条久時の娘赤橋登子、幼名は千寿王。元弘の乱で尊氏が西上すると、人質として母と共に鎌倉に抑留され、以後鎌倉で少年期を過ごした。

南朝との講和も進行して・・・
賀名生に拉致された光厳上皇は、かねてから夢窓疎石に帰依していたが、正平七年(1352)八月に出家し、軟禁五年後の正平十二年二月、河内金剛寺より還京した。光明上皇は正平十年に京へ戻って落髪し、仏道に入ったとされる。

義詮は南朝の掃討を始める
河内・紀伊国に出兵して南朝軍と交戦した義詮は、正平十五年(1350)二月、南朝に降った。

仁木氏は足利氏の一族で、同族の細川氏や高氏、上杉氏らとともに足利氏家臣団の主要メンバーでもあった。

仁木氏につき細川清氏も
細川清氏は幕政の実権を握り、將軍義詮の意に逆らうことも多くなり、義詮を呪詛した。その後南朝に走って四国で再挙を図ったが、同年(三月)改元して康安に九月、將軍義詮は後光

が失脚して南朝に降ると、一門の長老となった斯波高経の力が強くなり、幕府の実権を掌握する。
正平十七年(1352)七月、細川清氏が滅ぼされて空席となった管領職に、斯波義将(斯波高経の四男)が任命される。しかし、権力抗争は絶えず、義詮政権の運命は甚だしく流動的だった。

「正平の大地震」が発生する
その前年のこととなる。正平十六年(1351)六月廿四日寅刻、西日本太平洋沖で大地震が発生した。
『太平記』、『後愚昧記』(公卿三条公忠の日記)内大臣在職中、『後深心院閑白記』(重要文化財)などに、撰津四天王寺の金堂、奈良唐招提寺、薬師寺、山城東寺の堂塔が倒壊・破損したとの記録がある。

義詮は、関東執事に復帰するため、基氏の命を受けて鎌倉に向かった。これを知って芳賀高名は、途中の上野で憲頭を討ち取るうとす

観応の擾乱が起こって、執政の任にあった叔父の直義が失脚すると、正平四年(1349)貞和五年(1349)入京して政務を執る。翌年、直義が、それまで敵対していた南朝に降り、反撃に転じて尊氏軍を圧倒する。直義派に対抗するため、尊氏は義詮と共に南朝に降伏し、正平一統が行なわれる。次いで尊氏は直義を討つため東下すると、義詮は京都の守備を任された。しかし、正平七年(1352)文和元年(1352)閏二月、京都に侵入した南朝軍は、激戦ののち神器と三上皇を奪って賀名生に帰還する。

「矢口渡」で新田氏謀殺される
成立して間もない武家政権と争ったこととなる。宮方の要、新田義貞と長男の義頭は、尊氏方と争って敗れ、延元二、三年(1353)越前国で亡くなった。

延文五年(1350)五月、拠点となっていた河内の赤坂城ほかを攻め落した。金剛山の尾根上に築かれた赤坂城塞群は要害の地に在って「楠木七城」とも呼ばれた。下赤坂、上赤坂、千早の三城は、かつて楠木正成が足利方に対して抵抗する本拠として築城した。四方を絶壁に囲まれ、要塞堅固を誇った連郭式山城の千早城は、赤坂城の背後の山に築かれていた。

政権内の紛争に直面する・・・
尊氏が死去して仁木頼章が執事を兼ね、足利義詮からの援軍要請を受けて関西に攻め上ったが、陣中の紛争に巻き込まれる。

さらには畠山氏も失脚する
畠山国清は、足利義詮からの援軍要請を受けて関西に攻め上ったが、陣中の紛争に巻き込まれる。

「太平記」には「山は崩れて谷を埋み、海は傾いて陸地に成しかば、神社仏閣倒れ破れ、牛馬人民の死傷する事、幾千萬と云数を知らず」と記述されており、多少の誇張はあっても、大方は史実に基づいていと見られている。

鎌倉に戻った基氏は、上野・越後の守護職を公式に憲頭と与え、関東における足利勢力を固めることができた。

義詮は、関東執事に復帰するため、基氏の命を受けて鎌倉に向かった。これを知って芳賀高名は、途中の上野で憲頭を討ち取るうとす



足利義詮像(宝篋院蔵)

宝篋院は、京都市右京区嵯峨野に所在し、將軍・足利義詮の菩提寺であるが、南朝方の中臣・楠木正行の菩提寺でもある

義詮の政権は安定するか?
執事(後の管領)だった細川清氏

「観応の擾乱」のころに遡る。
北朝・義詮方に帰参するもの

山名時氏は縁戚に当たる足利尊氏に従い、守護大名として山陰地方に勢力を張っていた。その後直義・真冬に従ったが、將軍方の帰順工作が行なわれ、領国の安堵を条件として、正平十八年(1353)八月には義詮側に帰参して、以

常陸で挙兵した能憲と呼応して鎌倉

上杉憲顕は帰国せず、政治工作を進めて足利政権を味方に付けた。上杉朝房(憲顕の弟、憲藤の子)は基氏の後を継いだ足利氏満(當時十才)を擁して河越に出陣した。憲顕軍や武田氏・葛山氏らの軍勢が動員され、同年六月の河越における合戦で反乱は鎮圧された。

勝利した鎌倉・上杉軍は、続いて越後で挙兵した新田義宗らを討伐するため北上した。上野において両軍は衝突し、激戦となったが下野の小山義政らが鎌倉方に加わったため兵数に劣る新田勢は壊滅した。義宗は討ち取られ、脇屋義治は出羽国にまで敗走した(それぞれ異説あり)。

鎌倉軍は引き続き北関東における南朝勢の掃討を進めたが、同年九月、老齢の上杉憲顕は下野足利の陣中で病没した(享年62才)。

名門河越氏の終焉
河越館城主で、弾正(弾劾を行なえる権限をもつ役所)少弼、相模国朝の守護だった直重は、平一揆を率いて河越館に立て籠もり、数か月にわたり抵抗した。しかし、上杉朝房軍との激戦ののち敗北し、南朝方の北畠氏を頼って伊勢国へと敗走した。

ここに、平安時代から武蔵国の武士団の棟梁として「武蔵国惣検校職」をつとめ、武蔵国最大の勢力を誇った名門河越氏は、ついに四百年の歴史を閉じた。

南朝は衰退して・・・
正平九年(1354)文和三年(1354)十月、後村上天皇は河内長野市(現・大阪府河内長野市)を行宮と定める。翌年の正平十年(1355)文和四年(1355)一月、再び南朝に帰順した直冬を立てて京の奪回を目指したが、尊氏・義詮の軍に敗れて頓挫した。

正平十四年(1359)延文四年(1359)十二月、「観心寺」(現・大阪府河内長野市)に移り、翌年九月には住吉まで北上した。正平十六年(1361)康安元年(1361)幕府の政争に敗れて失脚した執事細川清氏の帰順を受け、十二月に宮方の要人だった公卿の四条隆俊、正成の三男の楠木正儀らが都に攻め込み、一時的に京の奪回に成功するが、義詮軍の反撃に遭って退いた。

後村上天皇は住吉行宮で、このころ、後村上天皇は摂津国の住吉大社宮司の津守氏の正印殿を行宮(住吉行宮)として、すでに十年近くも経っていたが、住吉大神を奉じる瀬戸内海の水軍を傘下に活動させることができた。しかし、正平十八年(1363)貞治二年(1363)には、山名氏や大内氏が北朝に帰順し、楠木正儀の投降などによって、南朝の力はさらに弱体化したので、退勢を挽回することはできなかった。

南朝はなほ
強硬な姿勢を貫き・・・
正平二十二年(1367)貞治六年(1367)四月、公卿の葉室光資を勅使として幕府との和睦交渉が行なわれたが、天皇は武家側の降伏を条件とされたため、義詮の怒りを買った末に和議は決裂した。

後村上天皇は崩御される
後村上天皇は崩御される
後村上天皇は崩御される



後村上天皇像(采女寺蔵)

浄土宗・来迎寺(大阪府守口市佐太中町)は後村上天皇の勅願寺

南朝方の戦士だった後醍醐天皇の皇子たち
後醍醐天皇は数多の子女をもうけたが、『太平記』などに記述されている皇子たちは、1護良、2尊良、3宗良、4恒良、5成良、6義良、7懐良で、共通する「良」の字は、「よし」とも、「なが」とも読まれている。

(一)護良親王(1308～35)
延慶元年(1308)に生まれ、母は源師親の娘。幼くして天台宗・三千院に入り、天台座主に補任された。延暦寺の勢力を討幕組織に組み込むための布石だったという。元弘元年(1312)後醍醐天皇が二度目の討幕に立ち上がる(元弘の乱)と、選俗して参戦し、弟の宗良親王と共に布陣した。しかし六波羅軍との合戦に敗れ、楠木正成の赤坂城に逃れた。この城も落ちたため、再起を期して畿内各地の野伏・地侍に令旨を発して反幕勢力を募る。十津川、吉野、高野山などを転々として二年にわたって戦い続け、播磨の赤松則村らによる京都侵入、六波羅攻撃を援護した。

(二)尊良親王(1310?～37)
延慶三年(1310)に生まれたとされているが、1306年生まれである。公卿で歌人だった二条為世の娘・為子を母として生まれ、幼少時は吉田定房に養育された。宗良親王の同母兄で、嘉暦元年(1316)に元服して、中務卿に任じられた。勅撰集の『統後拾遺集』のほか、准勅撰の『新葉集』に入集された歌人として知られる。

元弘の乱では、父後醍醐ととも笠置山に赴いたが、敗れて父と共に幕府軍に捕らえられ、土佐国に流された。しかし脱出して翌年九州に移り、その後、京都に帰還する。

元弘三年六月、後醍醐が帰京して新政府を樹立したとき、征夷大将軍の任官をめぐって足利尊氏と対立した。翌年十月、尊氏と阿野廉子(後醍醐の寵妃で、後村上天皇の母)の讒言を信じた天皇の命を受けた結城親光、名和長年らによって、清涼殿の和歌の席で捕縛された。

鎌倉に護送され、足利直義によって鎌倉二階堂の東光寺に幽閉される。建武二年(1332)七月、北条時行が鎌倉に侵入した中先代の乱で、直義の家人によって殺害され、墓所は鎌倉市二階堂に在る。武家から天皇中心の社会に復帰させることに尽力した親王の功を讃え、明治二年(1869)、明治天皇は、護良親王を祀る神社の造営を命じ、「鎌倉宮」を創建した。

(三)宗良親王(1311～85)
前記した尊良親王の同母弟で、母が歌道の二条家出身だったため、幼い頃から和歌に親しむ。宗門に入り、正中二年(1323)、妙法院(京都の天宮宗寺院)門跡を継承し、元徳二年(1330)には天台座主に任じられたが、元弘の変で捕らえられ、讃岐国(現・香川県)に流罪となる。

建武の新政で京に戻り、再び天台座主となるが、南北朝の対立が本格化するると選俗して宗良を名乗る。有力な氏族は離反して、南朝の勢力は大幅に低下した。

応安二年(1367)正平廿四年(1369)には関東管領上杉朝房の攻撃を受けていた異母兄の尊良親王や新田義興らは自刃、恒良は落城のさい捕らえられて京都に幽閉されたが、延元三年四月に毒殺された。

(四)恒良親王(1325～38)
後醍醐の寵妃だった、阿野廉子(かどこ、とも)(新待賢門院)を母として生まれた。義良親王(後村上天皇・成良親王は同母弟である。元弘元年(1312)、後醍醐の二度

義貞の子・新田義興とともに防戦したが、敵軍の兵糧攻めにあい、遂に力尽きて義興や他の将兵とともに自害する。自害の寸前、親王は義興から落ち延びるように勧められたが、同胞たちを見捨てて逃げることはできないと述べて拒絶したという。

観応二年(1351)足利尊氏が一時的に南朝に降伏した「正平一統」の折りには、新田義興(義貞の次男)とともに鎌倉を占領して、翌、文和元年(1351)正平七年(1356)には征夷大将軍に任じられる。しかし鎌倉を占領し続けることができず、ふたたび大河原の地に戻った。

文和四年(1354)正平十年(1355)諏訪氏・仁科氏など信濃の宮方勢力を結集して、北朝方の信濃守護と栲梗ヶ原で決戦を挑んだが敗れ、有力な氏族は離反して、南朝の興起をはかる。しかし翌年幕府軍の攻撃の前に城は落ち、同行していた異母兄の尊良親王や新田義興らは自刃、恒良は落城のさい捕らえられて京都に幽閉されたが、延元三年四月に毒殺された。

東海へ、また北上すると、諏訪を経て関東へと通じるので、「南朝の道」とも呼ばれた、後の「秋葉街道」の中心に位置していた。そのため、劣勢が続く南朝方にとっては重要拠点だった。

観応二年(1351)足利尊氏が一時的に南朝に降伏した「正平一統」の折りには、新田義興(義貞の次男)とともに鎌倉を占領して、翌、文和元年(1351)正平七年(1356)には征夷大将軍に任じられる。しかし鎌倉を占領し続けることができず、ふたたび大河原の地に戻った。

文和四年(1354)正平十年(1355)諏訪氏・仁科氏など信濃の宮方勢力を結集して、北朝方の信濃守護と栲梗ヶ原で決戦を挑んだが敗れ、有力な氏族は離反して、南朝の興起をはかる。しかし翌年幕府軍の攻撃の前に城は落ち、同行していた異母兄の尊良親王や新田義興らは自刃、恒良は落城のさい捕らえられて京都に幽閉されたが、延元三年四月に毒殺された。

この頃から南朝側歌人の和歌を集めた和歌集の編集を開始している。この和歌集は当初は私的なものだったが、長慶天皇は勅撰集に准ずるよう命じた。弘和元年(1320)永徳元年(1331)に『新葉和歌集』が完成して天皇に奉覧した。それ以後は、確たる記録が残されていないが、宗良は、元中二年(1325)ごろに遠江国(現・静岡県)に滞在した後、興国五年(1324)長野原(現・長野県)に招かれ、説もあつて、長らく拠点であったが、同年十二月、後醍醐が吉野に逃れたため廃された。

没年は、『太平記』によれば建武四(1338)延元二年三月、越前(現・福井県)金ヶ崎城の落城で捕らえられた恒良親王と共に幽閉され、次いで毒殺されたと記されている。しかし異説もあつて定かではない。

元弘元年(1312)、後醍醐の二度



賀名生の里のいま
出典: <http://www.geocities.jp/kitadewa/mukasi-anou.htm>

(六) 義良親王(1338~68) 父のあと十二才で即位、南朝二代の後村上天皇として、父の遺志を継ぐ。正平一統で北朝の天皇と皇太子が廃され、京都帰還がなるかと思われたが、後光厳天皇をたてた足利義詮に念願を阻まれる。南朝の京都への帰還を図り、大和(現・奈良県)の吉野・賀名生、和国(現・大阪府)の住吉などを軍の援助を得て数年間滞在した。行宮とした。

南朝二代の後村上天皇として、後醍醐天皇の第七皇子として生れ、建武の新政が始まると、幼くして、北畠父子に奉じられ、奥州多賀城に向かう。翌年、北畠親子とともに尊氏討伐のために京へ引き返す。建武三年、行在所の比叡山で元服、尊氏が敗れて九州落ちると再び奥州に赴く。しかし、延元二年/建武四年八月には再度上洛する。十二月に鎌倉を攻略し、西に向かう。翌年一月、美濃国青野原(現・岐阜県大垣市)で足利方を破り、伊勢・伊賀方面に進出した後、吉野行宮に入った。

父天皇の譲位を受けて踐祚。同年九月、義良親王は、宗良親王とともに北畠親房兄弟に奉じられ、伊勢国大湊から三たび奥州を目指す。しかし、途中暴風に遭って一行は離散し、親王の船は伊勢に漂着した。翌、延元四年/暦応二年三月、吉野に戻って皇太子となり、八月、父天皇の譲位を受け、十二才で踐祚した。

若年ながら、南朝二代後村上天皇は、畿内近国の寺社や武士に対して諭旨を発し、所領安堵や褒賞を行なった。

(七) 懐良親王(1339?~1383) 南朝の征西大將軍として、肥後国隈府(現・熊本県菊池市)を拠点に征西府の勢力を広げ、九州における南朝方の全盛期を築いた。建武新政は瓦解したが、このとき、再挙を図ろうとして、後醍醐は懐良親王を九州に派遣した。下の時期については、暦応元年/延元三年(1338)ころか、ただし諸説がある。幼少だった親王は、事務方の官人、五条頼元らの補佐で伊予国那智郡(現・愛媛県松山市)に渡り、その地の宇都宮貞泰(現・奈良県)の吉野・賀名生、や瀬戸内海に海賊衆だった熊野水軍の援助を得て数年間滞在した。暦応四年/興国二年(1341)ころ薩摩に上陸、谷山城に在って足利方の島津氏と対峙しつつ九州の諸豪族の勧誘に努める。ようやく肥後国(現・熊本県)の菊池武光や阿蘇惟時を味方につけ、貞和四年/正平三年(1352)、菊池城(守山城や隈府城とも)に入って征西府を開く。この地を九州経営の本拠として、筑後征討に着手した。

観応元年/正平五年(1350)、観応の擾乱で足利尊氏とその弟直義が争うと、直義の養子足利直冬は九州に入る。筑前の少弐頼尚がこれを支援し、九州は足利方、直冬、南朝の三勢力の鼎立状態となる。しかし、文和元年/正平七年(1351)に直義が殺害されると、直冬は中国に去った。これを機に九州探題の一色範氏は少弐頼尚を攻めたが、頼尚に支援を求められた菊池武光は針摺原の戦い(現・福岡県太宰府市)で一色軍に大勝する。さらに懐良親王は菊池・少弐軍を率いて豊後の大友氏泰を破り、一色範氏は九州から逃れた。

一色範氏が去った後、少弐頼尚が北朝方に転じたため、菊池武光



懐良親王像

南北朝の年表

長慶天皇		後村上天皇													南																																			
後光厳天皇													空位	崇光天皇		光明天皇			北																															
1369	1368	1367	1366	1365	1364	1363	1362	1361	1360	1359	1358	1357	1356	1355	1354	1353	1352	1351	1350	1349	1348	1347	1346	1345	1344	1343	1342	西暦	南朝 元号	北朝 元号	主な出来事																			
正平24年 応安2年	正平23年 応安元年	貞治6年	正平22年 貞治5年	正平21年 貞治4年	正平20年 貞治3年	正平19年 貞治2年	正平18年 貞治元年	正平17年 康安元年	正平16年 延文5年	正平15年 延文4年	正平14年 延文3年	正平13年 延文2年	正平12年 延文元年	正平11年 文和4年	正平10年 文和3年	正平9年 文和2年	正平8年 文和元年	正平7年 観応2年	正平6年 観応元年	正平5年 貞和5年	正平4年 貞和4年	正平3年 貞和3年	正平2年 貞和2年	正平元年 貞和元年	興国6年	興国5年	興国4年	興国3年	康永2年	天龍寺船、元に渡航する	天龍寺、落成供養が行なわれる	吉野行宮が陥落する	足利基氏は鎌倉公方となる	足利尊氏が一時的に南朝に降伏し、正平一統が成立	足利直義は急死する。北畠親房が正平一統を破棄。尊氏、征夷大將軍を解任される。八幡の戦い	足利基氏は入間川陣に移る	河内天野の金剛寺に行宮を移す	足利直冬の京都奪還は失敗する	南朝方に軟禁された光厳上皇は帰京する	足利尊氏は死去する	二代將軍義詮赤坂城を攻め落とす	正平の大地震が発生する	足利基氏は鎌倉に戻る	義詮は三乗坊門万里小路の邸に移る	二代將軍義詮死去する	後村上天皇住吉で崩御される	足利義満は三代將軍となる			

赤星武貫、宇都宮貞久、草野永幸ら南朝方は延文四年/正平十四年(1350)の筑後川の戦い(大保原の戦い)でこれを破り、康安元年/正平十六年(1361)には九州の拠点、大宰府を制圧する。両軍合わせて約十万人の大軍が戦った。足利方は斯波氏経(任:1361~1365)、渋川義行(任:1365~1370)を九州探題に任じて南朝方と対抗した。しかし相次いで敗退し、懐良親王は菊池氏の軍事力を背景として、征西將軍府を優位に保つことができた。

ただし、応安四年/建徳二年(1371)、今川貞世(任:1370~1380)が九州探題として赴任して、その勢力は切り崩される。翌年、大宰府は陥落して親王らは筑後国高良山(現・福岡県久米市)へと敗退を余儀なくされ、十一年に亘って九州に覇を唱えた征西府は崩壊した。

懐良親王の後継者は・・・九州を征圧して京都回復を目指していた親王は、このとき征西將軍職を退く。時期については諸説があつて定かではないが、後継として良成親王(後村上天皇の第七皇子で、母は越智家榮の女・冷泉局へ新待賢門院冷泉とされるが、同時代史料には名が見えないため、疑う説もある)が下向した。南朝勢力の衰退は覆うべくもなく、その後、懐良親王は筑後国矢部(現・福岡県八女市)に隠退し、弘和三年/永徳三年(1383)三月、この地で没したと伝えられている。

幼少で京都を出発してほぼ五十年、その後一度も京に戻ることのない生涯であつた。

日明貿易の道を開く
十三世紀から十六世紀にかけて、朝鮮半島や中国大陸の沿岸を

荒らす海賊や、私貿易・密貿易を行なう商人は「倭寇」と呼ばれた。中国人も含まれていたようだ。正平二十三年/応安元年(1388)に評定始が行なわれ、四月には管領細川頼之を烏帽子親として元服する。翌年、正式に將軍に就任し、細川頼之をはじめ、足利一門の守護大名の主導により帝王学を学ぶ。頼之は寺社本所領事(所領)の守護大名の主導により帝王学を学ぶ。頼之は寺社本所領事(所領)の守護大名の主導により帝王学を学ぶ。頼之は寺社本所領事(所領)の守護大名の主導により帝王学を学ぶ。

京都を支配する・・・京都の支配を強化するために、応安三年(1370)には、朝廷から山門公人(延暦寺及びその支配下の諸勢力及びその構成員)に対する取締権が与えられた。

文中三年/応安七年(1374)、宮中に影響力を持つ叔母・日野宣子の仲介によつて、日野業子を御台所に迎え、翌年の永和元年には、義満の執奏により、後円融院は、後拾遺和歌集の勅撰を下命した。室町に政庁を開く

天授四年/永和四年(1378)、邸宅を三条坊門より北小路室町に移して政庁とした。室町通に面して正門が設けられたことから室町殿、室町第とも呼ばれた。のちに通称として「花の御所」なる。この將軍の居所にちなんで足利將軍の家)の事を「室町殿(室町家)」と呼ぶ。江戸時代中期から、武家政治を争っている臣下と看做され、位を争っている臣下と看做され、外交関係をつぶす相手とは認識されなかつた。

これに由来している。

つづく

本紙「市民プレス」は年四回(二、四、七、十月、各五日)発行。

懐良親王は、南朝の征西大將軍として、肥後国隈府(現・熊本県菊池市)を拠点に征西府の勢力を広げ、九州における南朝方の全盛期を築いた。建武新政は瓦解したが、このとき、再挙を図ろうとして、後醍醐は懐良親王を九州に派遣した。下の時期については、暦応元年/延元三年(1338)ころか、ただし諸説がある。幼少だった親王は、事務方の官人、五条頼元らの補佐で伊予国那智郡(現・愛媛県松山市)に渡り、その地の宇都宮貞泰(現・奈良県)の吉野・賀名生、や瀬戸内海に海賊衆だった熊野水軍の援助を得て数年間滞在した。暦応四年/興国二年(1341)ころ薩摩に上陸、谷山城に在って足利方の島津氏と対峙しつつ九州の諸豪族の勧誘に努める。ようやく肥後国(現・熊本県)の菊池武光や阿蘇惟時を味方につけ、貞和四年/正平三年(1352)、菊池城(守山城や隈府城とも)に入って征西府を開く。この地を九州経営の本拠として、筑後征討に着手した。